

基礎医学では細菌学を学んだし、抗菌薬についても薬理学で教わった。実習した病棟には抗菌薬を投与されている患者さんもいらした。それなのに、いざ主治医として抗菌薬をオーダーしようとしてハタと困った研修医は少なくないのではないだろうか。どの抗菌薬を選べばよいのか、他の抗菌薬ではなぜダメなのか。投与量と投与間隔は本に書いてあるとおりでよいのか…。研修医としてそれぞれの診療科で各臓器の感染症治療を教わっても、異なる起因菌、異なる部位の感染症にはすぐ応用できない気がする。患者さんが高齢であったり、腎機能が低下しているとか妊娠中であるとか、考えなければならぬ要素が増えて途方に暮れた経験のある研修医もいるのではないだろうか。

「感染症」のマネジメントには、細菌に関する知識、抗菌薬への理解、感染部位や可能性のある起因菌など疾患に特徴的な事柄の3つの軸に沿って立体的に考えることが求められる。そのうえで年齢や基礎疾患の有無など個々の患者さんの状況にあわせた治療法を選択しなくてはならない。これらを体系的に教えられたことがないと、いつまでたっても知識は点と点のままにとどまり、新たな患者さんの治療を求められたときにアプローチできず悩んでしまうことになる。藤本卓司著『感染症レジデントマニュアル』は、そのような研修医のために書かれた教科書である。著者の言葉を借りると、「感染症の「地図」を持たずに迷子になって右往左往している医学生・研修医」を対象としている。

藤本卓司先生は市立堺病院の指導医として、「臨床に役立つ感染症学」をベッドサイドで日々教えておられる。ご自身の病院の研修医のために作成して配布された手作りのテキストが、『感染症レジデントマニュアル』の前身である。黄色い表紙だったの

で「黄色本」と呼ばれ、オリジナルが手に入らなくなってからあとの研修医は一生懸命コピーして使っていたと聞く。その本を見た人や評判を聞いた他院の医師からも問い合わせが多数寄せられ、伝説のマニュアル的存在であったようだ。今回その黄色本がさらにグレードアップして「レジデントマニュアル」として刊行され、全国の医学生・研修医も手にとれるようになった。

『感染症レジデントマニュアル』は、白衣のポケットに入るサイズでありながら感染症マネジメントに必要な事柄が網羅されている。「主な起炎菌と第1選択薬」の章は細菌のグラム染色のイラストからはじまり、「臨床上的特徴」という項目には診療に直結する知識がコンパクトにまとめられている。

「抗菌薬」の章には、薬理学的な特徴に加えて他の抗菌薬との違いや注意すべき副作用、他剤との相互作用が記載されており、使い勝手のよさが想像できる。さらに、「各種感染症」の章のMemo欄には、身体診察のポイントから臨床の達人ならではのワンポイントアドバイスまで盛り込まれている。通読すると、まるで藤本先生の回診にくっついて勉強させていただいているようだ。

感染症はとっつきにくいと感じている学生・研修医にはもちろん、感染症領域のレベルアップを図りたい指導医にも役立つ1冊である。起因菌の頻度や抗菌薬への感受性は施設によって多少異なる可能性もあるので、研修医は症例ごとに自分の指導医に確認しながら感染症マネジメントに挑戦してほしい。この「地図」があれば、楽しみながら感染症を自分の得意分野にすることがきっとできる。

(B6変型 412頁 定価3,990円(本体3,800円+税5%))
2004年 医学書院 刊